

東大寺僧形八幡神坐像と重源上人坐像について ——大勸進重源と別当弁暁の関係を手がかりに——

瀬谷 貴之（神奈川県立金沢文庫）

東大寺に安置される僧形八幡神坐像と重源上人坐像は、ともに南都焼討後の鎌倉再建期の同寺における重要彫刻作品とされる。僧形八幡神坐像は、銘文から建仁元年（1201）十二月に仏師快慶が施主となり造立されたことが知られ、その代表作に挙げられる。また銘文中に名前は確認されないが、東大寺大勸進重源の造像への関与が指摘される。一方、重源上人坐像は建永元年（1206）六月の没後間もない頃に有力な慶派仏師により製作され、東大寺に安置されたと考えられてきた。本発表では改めてこの二作品について、今まであまり指摘されてこなかった、東大寺尊勝院の院主で同寺別当も勤めた弁暁との関係に注目して検討したい。なぜなら二作品は、弁暁と重源の密接な関係を前提に造像され、それは東大寺の鎌倉再建事業において見逃せないことだからである。

弁暁は唱導の名手としても知られる。金沢文庫が保管する『東大寺尊勝院弁暁説草』からは、東大寺再建にまつわる広汎な活動の一端を知ることが出来る。そして、そこに収録される一部説草や、『八幡大菩薩并心経感応抄』、『東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記』などの関連史料を検討すると、東大寺鎮守八幡宮の再建は、重源の意向を受けた弁暁を中心に行われたことが判明する。すなわち文治二年（1186）の再建を起請した東大寺衆徒の伊勢神宮参詣、同四年の社殿再建、建久八年（1197）の本格的社殿再建による遷宮の何れもが、重源の意向を汲み弁暁が行ったものであった。さらに東大寺鎮守八幡宮再建事業の最終段階で行われたのが、建仁元年末の本尊とも言える僧形八幡神坐像の造立である。弁暁は建久十年正月に東大寺別当になり、建仁二年六月に辞している。すなわち弁暁の東大寺別当就任中にその影響下で、僧形八幡神坐像の造立は実現した可能性が高い。

これら東大寺鎮守八幡宮の再建事業で明らかのように、大勸進重源に対して一貫して寺家側（東大寺内）の協力者であったのが弁暁だった。さらに、この並々ならぬ両者の関係を考える時、最も見逃せない作品が、現在、東大寺俊乗堂に安置される重源上人坐像である。同像は『元亨釈書』の解釈などにより、建永元年の没後に製作されたという説が多く支持されてきた。しかし一方で、その迫真性なども考慮し生前の寿像とする説もあった。ここでは本像が東大寺別当弁暁を中心とする寺家側より、重源が八十賀を向かえた正治二年（一二〇〇）頃に造立された可能性が高いことを提示したい。そして、この寿像説は、日本肖像彫刻の最高傑作の一つとされる本像の位置づけの見直しにも関わる。

なお両像の製作者は、僧形八幡神坐像が銘文により快慶と判明し、重源上人坐像がその作風から運慶が最も相応しいとされる。この製作者の問題については、八幡信仰と快慶の密接な関係や、東大寺再建事業における弁暁を中心とする寺家と運慶一門の関係から検討を行いたい、詳細は発表時にゆだねたい。